特253
105

文學博士　井上哲次郎述

日本の皇道と滿洲の王道

東亞民族文化協會
（パンフレット第五篇）

始

特253
105

日本の皇道と滿洲の王道

文學博士　井上哲次郎

發行所寄贈本

一

私の演題は日本の皇道と滿洲の王道といふのでありますが、其の目的は滿洲の王道は如何なる性質の王道でなくてはならないかといふことを明かにするにあるのであります。それで、我が日本の爲にする講演といふよりは寧ろ滿洲の爲にするのが其の目的であります。然し、滿洲の王道は如何なる性質のものにすべきかといふことを明かにするが爲には、日本の王道、即ち皇道を說かなければならないし、又これと對照して支那の王道を說かなければなりません。日本の王道即ち皇道を說き、又支那の王道を說くにしても、講演の目的は滿洲の執るべき王道の何たるかを明かにするのでありますから、それを眞先に諸君に申上げて置き度いのであります。

是れ迄の處滿洲國建國の宣言によれば、滿洲國は確かに王道立國を標榜して居るのでありますが、其の王道は支那の王道を意味して居るやうであります。是れは私が滿洲國の爲に甚だ遺憾に思うてゐるところ

であります。何うも支那の王道では滿洲の將來の爲に甚だ危ぶまれるのでありますから、何うか支那の王道に據らないで、日本の王道、卽ち皇道に據るべきであらうと思ふ。ところが或る人は斯う云ふのであります。滿洲國では支那の王道に據ることは心得て居るけれども、日本の王道、卽ち皇道に據ることは如何にも不慣れで、全く勝手が分らないやうに思はれる。支那の王道に對しては是れ迄理解をしてゐるが、日本の王道に對しては全く不案内で、さう云ふ習慣が出來て居ないから、甚だ困るといふやうな話であります。然しさういふわけのもので無からうと私は思ひますから、是れより私の見る所を一通り述べて見ませう。それで暫らく御清聽を煩はし度い次第であります。

二

先づ日本の王道から話の端緒を開くことに致します。日本では建國以來王道が行はれて居りました。儒教は應神天皇十六年に輸入されたのでありますが、それより前から王道は立派に行はれてゐました。但し王道といふ名は無かつたが其の實はあつたのであります。後、支那文明が輸入されるに及んで、日本の天皇を王者と見ることになり、王道を違つた觀點から見ていろ〳〵に申したのであります。或は「大道」と云ひ、或は「古道」と云ひ、或は「帝道」と云ひ、或は「神ながらの道」と云ひ、ハッキリ王道と申したのは仁明帝の詔から始まるのであります。それからして又、之れを皇道といふことは　後一條帝の詔に出て居ります。併し是れが日本に於ける皇道といふことの始めての出典ではありません。是れに先立つて『類聚

國史』に見えて居ります。それは山本信哉博士の報道によつて明らかとなつたのであるが淳和天皇天長五年藤原緒嗣等の上奏文に見えて居るのであります。明治時代に至つては『五ケ條御誓文』に「天地ノ公道」とあり、又『軍人勅諭』にも「天地ノ公道」とあり、而して『教育勅語』には「斯ノ道」とあります。斯樣に日本では道をいろ〳〵に言つたのであるけれども、道がさう幾つもあるわけではない。我が日本に行はれて居る道は實は唯々一つの道であります。一つの道が古今を一貫して居ります。それであるから、

孝德帝の詔に「帝道唯一」とあります。これは注意すべきことで、天皇の行はせらるゝ道は唯々一つ外無いので、二つ若しくは三つあるわけではない。それで　明治天皇の御製に

千早ぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

と斯うあります。此の御製に見えて居るやうに、道は一筋のものであります。此の一つの道を　明治天皇は屢々「敷島の道」と申されたのであります。「敷島の道」も「神ながらの道」も決して違つたものでなく、日本固有の道を斯樣に仰せられたのであります。但し斯の道は日本の最古時代からあるのであるから「古道」であるが、又斯の道の廣大無邊なるところから云へば「大道」であります。尙ほ世界的に考へれば「天地ノ公道」であり、天皇が帝王として行はせらるゝところから云へば「帝道」であり、王者として行はせらるゝところから云へば「王道」であり、天皇の行はせらるゝところから云へば「皇道」である。而して「斯ノ道」と『教育勅語』にあるのは支那で云ふやうな儒教のことではなくして、「日本固有の道」を云ふので

あります。「日本固有の道」は一元的で、決して種々あるわけではない。而して此の「日本固有の道」は支那の言葉を藉りて云へば王道であります。王道は簡單に云へば德治主義の政治であります。此の點に於いては儒教の王道と異つた所は無い。併しながら、支那で云ふ王道は「禪讓放伐、易姓革命」の意味を含んで居るもので、聖人賢者と雖も之れを否定して居らぬ。日本の王道は決して其のやうな禪讓放伐、易姓革命などを認めて居らぬ。卽ち萬世一系の皇統で何處迄も貫いて行くやうに定まつて居る。それは『神勅』に據つてさう決められてゐる。さういふわけであるから、日本の王道と支那の王道とは共通點もあるけれども、亦なか〳〵重大な差違點がある次第である。それで單に王道と云へば支那の王道と混同される恐があるのであるから、日本の王道は皇道と云つた方が紛らはしくない。皇道といふ言葉は德川時代にも使つたのであるが、近來世間で多く皇道といふ言葉を使ふやうになつて來たのは支那の王道と混同されないやうにするが爲であるからして、吾々も之れを皇道といふことに於いては決して躊躇しないのである。但し、皇道と云つても、其の內容實質は矢張り王道に外ならない、但し日本の王道である。云ひ換へてみれば「神ながらの道」又は「敷島の道」と云ふべきで、畢竟日本固有の道である。我が國に於ける皇統一系は此の日本固有の道を體現なされたもので、我が國體は永久不變の基礎の上に成立して居るものである。而して今日の如く、我が國の國運次第に隆盛になつて行くのは決して偶然ではない。單に權力に據つて成立して居るのでもなければ、又利益によつて成立してゐるのでもない。換言すれば權力主義とか功利主義とか、

さういふ主義で國を成してゐる所が少くないが、我が日本はさういふものではなくして、それらを超越したる「神ながらの道」に據つて成立して居るもので、それで諸外國と違つて千年經つても二千年經つても國家の基礎は鞏固にして、益々隆盛に赴く次第であります。

ところが、滿洲國は一昨々年に出來て、而して夙に王道立國を標榜し、殊に昨年の三月一日からは攝政溥儀氏を滿洲國皇帝と仰ぎ、益々王道樂土の實現に努力することになつたのである。誠に東洋平和の爲に喜ばしいことで、支那だの露西亞だの多くの國々が道を顧みないやうな時勢に於いて滿洲國は王道を以て國家を建てることになつたのは文化史上殊に注目すべきことではなからうか。但し滿洲國の王道は支那の王道であつてはならないと思ふ。何故支那の王道であつてはならないか。是れに就いて少しく自分の見る所を述べて大いに滿洲國の反省を促したいと思ふのである。

三

支那の王道は堯舜時代から周の初め迄多分行はれたであらうと察せられる。支那文獻の傳ふるところを悉く信ずるわけには行かないけれども、マア王道は大體唐虞三代を通じて或る點迄は行はれたであらう。而して王道のことは誰も知つてゐるやうに『書經』の「洪範」に見えて居る。其の後論語に說かれてある事は言ふ迄もない。殊に『大學』の「經一章」は治國平天下の道卽ち王道である。又、孟子の中にも王霸の辯が見えてゐるやうに、王道を德治主義として說いてある。併しながら王道は何うも孔子の時代に至つてはもう

行はれなくなつてしまつた。然も孔子の如き大人格を以てして之れを説いたのであるけれども、少しも王道は行はれなかつた。孔子より百二三十年後れて孟子が出て、又王道を説いたけれども、これ亦少しも行はれなかつた。それから以後王道は終に支那に於いて行はれたことがない。漢の武帝の時に董仲舒が王道を説いたのであるけれども、武帝も終に王道を實行することが出來なかつた。唐の太宗の時には王通の門人等が樞要の地位に在つて、而して魏徵の如きは特に王道を説いたのみならず、太宗が餘程王道を實行しさうな形勢もあつたけれども、太宗も終に王者たることを得なかつた。元來彼は簒奪者であり、王者たるの資格に於いて大なる缺陷があつたのである。其の後中華民國に至る迄王者といふべき人は一人も出なかつた。換言すれば、或は王覇折衷を行ひ、或は覇道を行つた者はあるけれども、立派な王道政治を行ひ、王者たるの資格を完うした者は終に出なかつたのである。中華民國となつては三民主義を憲法の如くに遵奉して居るやうである。あれが本當に何れ程迄に廣く社會に行はれて居るか疑問であるけれども、然しあれ以外何物も無いのである。三民主義は王道主義などとは丸で違つた立場を取つたもので、功利主義、權力主義、共産主義といふやうな思想のこんがらがつて出來たもので、王道の精神とは丸で違つた性質のものである。大體さういふわけであるが、抑々王道が何故支那に於いては行はれなくなつたか、此のことを闡明しなければ事情が十分分らないであらう。而して何故王道がそのやうに支那に於いて行はれなくなつたかといふことが分れば今頃それを蹈襲する人が無い筈である。支那と正反對に日本に於いては、建國以

來立派な王道が行はれて、今日に至つて居るのみならず將來と雖も此の點に於いては毫も間違ひは無いと思ふ。卽ち日本國のあらん限り王道は行はれて行くのであるが、支那に於いては夙に行はれなくなつてしまつた。その行はれなくなつてしまつたのを滿洲國に於いて行はうとしたところが、それは復た早晩支那の覆轍を踏む張本であらう。これが私の何うしても滿洲國の爲めに辯じなければならぬ點であります。

四

支那の王道は『書經』の「洪範」に述べてあるやうに、立派な理想的な政治でありますが、帝王は天の命によつて其の地位に卽くもので、天に代つて天の意志に從つて政治を行はなければならないものであります。それで之れを天子とも云ふ次第であります。云ひ換へてみれば、天の命によつて位に卽く最高の役人の如きものであります。それで帝王がそのやうに天の命を奉じて其の位に卽き、人民に對して仁政を施す時には天が之れを認めて休徵を表すのであります。休徵とは瑞徵で卽ち鳳凰だの、麒麟が出で、又景雲などが現はるゝのであります。ところが、帝王が帝德を失つて失政多き時は天が咎徵を表して之れを誡めるのであります。咎徵とはいろ〳〵好くない徵候で、例へば地震とか旱魃とか洪水とか海嘯とかいふやうなことを云ふのであります。さうすると帝王は天を恐れて謹愼しなければならない。謹愼すれば復た天の惠を得るやうになるであらうけれども、若し謹愼しない時は帝王は卽ち帝德を失つたもので、其の帝位に在るべきでない。天は他の帝德ある者を選んで是れに代つて帝位に卽くやうに任命するのであります。さ

ういふ時に革命が行はれる。革命は支那に於いては最古の時代から認められて居るもので、而して孔孟の如き聖賢も之れを否定して居らない。孟子の如きは露骨に之れを是認して居るやうな次第であります。是れが日本と餘程違つた點であります。支那では革命は四時の循環と同じやうに、當然行はれるべきものと認めたのであります。日本は初めから革命を認めて居らない國で、而して終に革命のあつたことがない。支那と日本とは此の點に於いて非常に違つて居る。支那にも王道が行はれ、日本にも王道が行はれたけれども、支那の王道と日本の王道とは共通點を有しながら、又なか〳〵重大なる差違點があるのである。それで日本の王道は前述の皇道と云うて、支那の王道と區別する必要が多大にあるのであります。

それのみならず、孔子の時代卽ち春秋時代に於いては『左傳』に據つて十分知り得らるゝやうに、社會が非常に惡化して風俗が頽廢して居つた。而して孟子が云つたやうに、本當に「春秋ニハ義戰無シ」であつた。春秋時代には戰鬪攻伐寧日無しといふ狀態であつたが、義戰といふのは一つも無い。戰爭は皆權力の爲か又は功利の爲かに行はれたもので、眞に無意味の戰爭と申しても差支へ無かつたのであります。而して當時支那は幾多の國に分裂して居つた。小さな附庸の國迄加へると約二十ケ國ばかりになつて居つたけれども、本當に王道を行ふやうな名君といふは一人も無かつた。卽ち王者とも云ふべき資格ある人は何處にも居らなかつたのであります。周室は尙ほ存續して居つたけれども、これ亦甚だ振はなかつた。孔子は「春王ノ正月」と特筆して周室を尊崇したけれども、實は王者とも云ふべき名君が周にも無かつたのであります。此の時に於いて天が帝德ある者をして帝位に卽かしむるものであつたならば、何うしても此の時より切迫したことは無かつたのであります。さうして帝德ある者が確かに一人はありました。德、堯舜より賢れる人があつた。それは外ではない、孔子其の人であります。ところが孔子は適當な地位を得て仁政を施さうとして、前後十三年間も各國を歷遊したけれども、終に其の地位を得なかつた。而して遂に失意の境遇に陷つたのであります。『中庸』に「大德ハ必ズ其ノ位ヲ得」とあるけれども、孔子は終に其の位を得なかつたのであります。是に於いてか、昔から信ぜられて居つたやうに、天が帝德ある者を帝位に卽かしめて、天に代つて仁政を施さしむるといふやうな、さういふ傳統的信念は壞れてしまつた。孟子が孔子より後るること百二三十年にして矢張り諸侯に仁義の道を說いて廻つたけれども、皆其の說を以つて迂闊なりとして採用しなかつた。孟子の說いたのは無論王道でありましたが、それは少しも社會に行はれなかつた。言ひ換へてみれば、孔孟の如き聖賢の身を以て其の時代に各々王道を說いたのであるが、其の王道は毫も實行されないで、世は益々惡化して行つたのであります。それから以後覇道が行はれたことがあり、又王覇折衷も行はれたことがあるけれども、終に純然たる王道の行はれたことが無い。而して屢々簒奪者に天命と云ふ好い口實を與へたやうな次第で、而して覺に王道の再び行はるべき徵候のあることを見ないのであります。それでありますから、支那の王道は天命による革命を是認してるが爲に世の中が段々開けて智惠が進み、幾多の經驗を累ねて懷疑心に富み、遂に傳統的の迷信を信じなくなつて來たゝめに、到底昔の

やうな王道は行はれないやうになつて來た。それは當然の事のやうに思はれます。それであるから、滿洲國が王道樂土を理想とするのは結構であるけれども、支那の王道を實行するならば、將來簒奪者に大變都合の好い口實を與へ滿洲國も亦遂に支那の覆轍を踏むことになる恐が多大にあるのであります。それでありますから、滿洲國では何うか日本の王道を實行して滿洲國を永久に和氣靄々たる樂土と爲すことを期すべきであらうと思ひます。日本の王道は卽ち皇道で、是れに據つて行けば滿洲國は日本と同じやうに永久不變の基礎を得る次第であります。固より日本の皇道を實行しようといふのには、神人一如の精神を以て血統繼續で進んで行かなければならないと思ふ。是れは我が日本の爲に云ふ必要はないことで全く滿洲國の爲に云ふのであります。固より滿洲國が立派な永久不變の王道樂土となれば、必ず我が日本の爲になるでありませうが又廣く世界平和の爲にもなるでありませうからして、玆に自分の信ずる所を率直に申し述べて滿洲國の參考に供する次第であります。（昭和一〇、六、二九）

井上博士は、昭和九年七月本會主催の「日滿文化講座」に於いて、「日本の皇道と滿洲の王道」と題して一時間餘講演されたが、今回、全然稿を新にして右の一篇を寄せられたのである。これは、滿洲國の王道は、日本の皇道に據るべきものたるを論述されたもので、日滿兩國人の敬聽すべき至言である。依つて本會は近く刊行する「東亞文化論集」より特に此の一篇を採り、日滿兩國の心ある人々の高覽に供ふる爲めに小冊子としたのである。

なほ本會は昭和八年十二月、「王道立國の指導原理」と題する井上博士講述のパンフレットを刊行頒布して、王道の本質を闡明する事に努めたが、この「日本の皇道と滿洲の王道」と併せ讀まれたならば一層益するところあらうと思ふ。

東亞民族文化協會創立趣旨

我等は、過去の歴史と眼前の事象とに依り、「血は水よりも濃し」といふ諺の眞理たるを痛感せしめられた。

殊に、滿洲建國後の世界の情勢は、政治に經濟に文化に、濃度の强烈なる國家及民族の結合提携に依りて、自己の保全と幸慶とを獲得せんとするの傾向いよ〳〵熾烈となり、今や東亞民族は、其の犧牲壇上の小羊の感があるのである。

我等は、東亞に生を享け、東亞の天、東亞の地、東亞の水に依りて育成され來つた。寔に我等は「東亞の子」である。

是を溯れば悠々五千年、燦たる文化の業績を繼承せる我等は、更にこれを向上渾成せしめむるの重大なる責務を有するのである。

我等は嘗つて世界の指導者であつた。其の崇高なる文化は能く人類を光被した。又其の强剛なる武力は横暴專恣なる種族を正道に向はしむる指針であつた。「聖心雄手」は我等東亞民族が其の發祥以來の標語であつたのである。

然るに今は如何、人種的には白人の鞭に從ひ、文化的には其の同化を强要され、經濟的には飽くなき搾

取に甘じ、地理的には恣なる分割を默視せねばならないのである。

吁、この歪曲されたる情勢を是正して東亞本來の面目に還元せしめ、以つて悠久なる子孫に傳ふるは、我等に與へられたる使命に非ずして何ぞや。

然れども我等は徒に種族的對立觀念の激化を謀りて快とするものではない。たゞ我等東亞民族は、其の習性及文化の根源を同うし、相和し相交通して、普く人類の福祉增進に努め來りし光榮ある歷史と、近來の世界的傾向とに深く鑑みるところあり茲に「東亞民族文化協會」を創設し以つて東亞民族の親善融和を計り、其の文化の本質を顯現發揚するの急務たるを感ずる。これ實に東亞民族の提携と興隆は、世界和平の基調たるのみならず、世界の文化に貢献するの偉業たるを確信するが故である。

東方よりの光明は、全人類を遍照する。希くは東亞の同胞よ。其の責務と使命とを自覺し相呼應して本會の微意を協贊達成せしめられんことを。

昭和八年十二月

綱領

一、本會ハ、東亞民族ノ習性及ビ文化ヲ考究シ、其ノ向上渾成ヲ期ス。

一、本會ハ、東亞民族ノ團結興隆ハ世界和平ノ基調タルヲ確認ス。

一、本會ハ、崇高ナル東亞文化ノ闡明弘布ニ依リテ、歪曲セラレタル世界ノ現狀ヲ是正センコトヲ期ス。

東亞民族文化協會

理事長　國學院大學教授　堀江秀雄
理事　文學博士　小柳司氣太
同　文學博士　內藤智秀
同　理學士　田邊尙雄
同　文學士　松永材
同　文學士　森田銕三郎
同　鎌倉宮々司　座田司氏
常任理事　小笠原省三

會員の一部

文學博士　山本信哉　　文學士　松永材
文學博士　內藤智秀　　文學士　松井等

文部省宗教局長　下村壽一
文學博士　田中義能
文學博士　小柳司氣太
神宮奉齋會長　今泉定助
貴族院議員　塚本清治
理學士　田邊尚雄
文學博士　河野省三
皇典講究所理事　松尾捨治郎
日枝神社司宮　西惟助
文學士　森田銕三郎
文學博士　植木直一郎
文學博士　藤村作
靖國神社司宮　加茂百樹
文學博士　紀平正美
文學博士　加藤玄智
國學院大學教授　鳥野幸次
皇典講究所專務理事　副島知一
文學博士　宮地直一
內閣調査局長官　吉田茂
文學博士　市村瑞次郎
文學博士　三上參次
明治神宮權宮司　秋岡保治
文學博士　鳥居龍藏
文學博士　白鳥庫吉

（以上署名順）

「東亞文化論集」刊行豫告

本會は、日滿兩國の文化關係を闡明しそれに依りて兩國民の親善を企圖し更に東亞全體の興隆に資するため、昭和九年六月十五日より七月六日迄一週二回乃至三回、神田區一つ橋商科大學講堂にて「第一回日滿文化講座」を開設し日滿兩國の學徒に聽講せしめたが、今回その講演集を整備して「東亞文化論集」と題して刊行し普く日滿友の公共機關に寄贈して東亞文化の普及弘布に努むることゝなつた。其の要項は次の通りである。

題字「萬邦協和」　內閣總理大臣　岡田啓介氏
題字「大東一心」　對滿事務局總裁　林銑十郎氏
序文　外務大臣　廣田弘毅氏
發刊趣旨　本會理事長國學院大學教授　堀江秀雄氏

目次

日滿の史的關係　文學博士　白鳥庫吉氏
東洋音樂の長所　理學士　田邊尚雄氏
佛教傳道史より觀たる外來文化と國民性　文學博士　矢吹慶輝氏
武士道　文學博士　河野省三氏
東洋精神の眞髓　文學博士　紀平正美氏
日本主義と滿洲帝國　文學士　松永材氏
日本の皇道と滿洲の王道　文學博士　井上哲次郎氏
東洋民族と選擧制度　法學博士　趙欣伯氏

社會問題の日本的考察
日滿兩國の文化的使命
滿洲の建國精神に就て
滿洲の古建築と古墳

跋文

協調會理事　吉田茂氏
外務省對支文化事業部長　坪上貞二氏
文學博士　小柳司氣太氏
工學博士　關野貞氏
外務省對支文化事業部長　岡田兼一氏

以上

昭和十年八月二十日　印刷
昭和十年八月二十五日　發行
（パンフレット第五篇）

東京市本郷區彌生町三番地ほ一二〇號
發行者　東亞民族文化協會
右代表者　小笠原省三

東京市小石川區西古川町二五
印刷所　中外印刷株式會社

東京市本郷區彌生町三番地ほ一二〇號
發行所　東亞民族文化協會
電話小石川四一六三番

終